



KS 海城中学高等学校

未来を見据えた次の一手

授業の枠を超え、ワクワク学べる場を創出。
知的好奇心の赴くまま、新たな学びのステージへ

Tokyo
Kaijo
Junior & Senior
High School

海城中学高等学校では大学受験に向けた教科授業だけに偏らず、生徒が主体的に学ぶための様々な学習プログラムを設けている。今年度からは、新たに教科横断型、学年横断型の「特別講座 KS プロジェクト」が始動。従来からのプロジェクト・アドベンチャーやドラマ・エデュケーションなどの取り組みに、さらに KS プロジェクトが加わり、学びのフィールドは大きく広がっている。



「言語系外部コンテストにチャレンジ」では俳句甲子園にチャレンジし、全国大会に選出。高1の青木暢也君の作品「敗北の砂混じりたる髪洗ふ」が優秀賞に選ばれた



「プログラミング講座」ではiPadを使ってプログラミングの基礎を学ぶ。学んだことを発表するのも大切な課題の一つ



「総合フィールド演習」では、メインイベントとして2泊3日の大阪巡検旅行を実施。社会（歴史）、国語、理科（地学）担当の教員が同行し、地図を片手に旧跡や街並みを探訪。歴史や地勢、街並みの構造や成り立ちなど、様々な観点から実地調査を行った



主体的に学び続けていく姿勢を育てるKSプロジェクト

「特別講座KSプロジェクト」とは、各教科の枠を超え、生徒が主体的に学んでいくプロジェクト形式の講座だ。様々なテーマのもとで講座が設定され、生徒は自分の興味・関心に合わせて希望制で受講する。1学期には、「プログラミング講座（初心者編）」、「総合フィールド演習～人文科学・自然科学から地域を考える～」など6つの講座が、さらに、夏休みには4つ、2学期には7つの講

座が開講された。

KSプロジェクトを始動した背景について、内田玄司教頭は3つの観点を挙げる。

「第一に、生徒たちが高校卒業後も主体的に学び続けていく姿勢を育てたい、という思いがあります。今の世の中は変化のサイクルが激しく、社会で活躍し、充実した人生を送るためには、一学生び続けることが不可欠です。そしてそのためには、中高生時代に物事に積極的に関心を持ち、ワクワクする気持ちや学ぶ楽しさを体験することが非常に重要なので

す。また、科学技術やITの発達により、あらゆる情報を自力で調べられるようになり、通常の授業の枠では取まきらない”とがった・突き抜けた”興味・関心を持つ生徒がこれまで以上に増えてきたという背景もあります。生徒たちの”とがった”興味に応えられる場をつくりたいという思いが、教員のなかでも大きくなっていました。さらに、2020年の大学入試改革を見据えた取り組みという一面もあります。新たな大学入試制度では、生徒の高校時代の学びの履歴が重視されるようになります。授業の枠を超えた体

験型の学びの積み重ねは、大学入試でも役立つと考えています」

外の世界とつながり、広く、深く学ぶ

講座の内容は多様だ。プログラミングや数学の入試対策といったものから、「俳句甲子園」への挑戦、洋書多読、英語による新聞づくり、国語・社会・理科の教員による文理融合のフィールド演習まで、実に幅広い。テーマは教員が中心になって設定したが、「日経ストローク」に参戦したいという生徒からの提案を受けて、開設した講座もある。ただし、講座設定において一つだけ条件を設けた。「外部とのつながりを持つ」ということだ。これは、同校が以前より重視してきたことでもある。

「本校では20年以上にわたり課題設定解決型の学びに取り組み、中学1年生から3年生に対してレポートを課してきました。生徒は自分で課題を設定し、その解決策を探っていくのですが、手法として専門家など外部の方への対面取材を必須にしています。取材依頼から実際のインタビューまですべて自力で行うの

ですが、失敗も含めて、この経験を通して生徒は大きく成長します。こうした生徒の姿から、学外の世界とつながることは非常に重要だと考えているのです」（内田教頭）

1学期に続き2学期にも開講されている「生物・化学実験の動画を撮ろう」では、生徒が制作した動画をきっかけに、海外協定校の新モンゴル学園の生徒と11月にskypeで交流することが決定。モンゴルでは実験器具や設備が不十分で、生徒にとって理科の実験動画は貴重な教材なのだ。また、動画は学校説明会でも流した。入試広報室長の中田大成教諭は、「大人がつくった学校紹介動画よりも、ずっと反応が良かった」と話す。

同講座では、授業では駆け足になりがちな理科の実験にじっくりと取り組み、学びを深めることを目的としている。「動画の編集スキルは、生徒の方がずっと高いんです。実験についてはアドバイスをしますが、あとは生徒たちが自分たちで工夫してどんどん進めています」と同講座を担当する理科教諭の石塚泰啓教諭。1学期に受講した生徒の8割以上が2学期も継続的に受講しているという。

すでに多くの生徒が参加し、好評を得ているKSプロジェクト。本格実施が始まる来年度に向けて、中田教諭はこう語る。

「探求学習で重要なのは、教員自身がおもしろがることだと思うんです。何かを教えるのではなく、ワクワクしながら探求する姿勢を生徒に見せることで、生徒の興味・関心や意欲に火が付きまします。火がついた生徒は、自発的にどんどん探求していきます。本校では中学で基礎となるリテラシーを全員が学びますが、高校では個別に興味・関心を深めていけばいいと考えています。学びの場は学内だけに限りません。さらなる学びを求めて積極的に外に出ていくためのきっかけとして、このKSプロジェクトがスイッチになればと思っています」

学校を軸に、学びの場を外へ外へと広げていく。そして、自分の興味・関心のあることを深く深く追求していく。そんなダイナミックな学び、ワクワクする学びがあるからこそ、海城の生徒は大学入試というハードルも易々と飛び越えていくのだろう。



KSプロジェクトのプロジェクトリーダー、内田教頭



「主体はあくまでも生徒。教員はファシリテーター役に徹します」と石塚教諭